



関ヶ原軍記

初編十一

十二

遠13
2207
6



門八遠13
冊2207
巻6

池清

園ヶ原軍記初篇卷之拾壹

目録

- 一 柳原康政謀略的當 さうげん やまもと 御目見之夏 みめ
- 并伏見城盤石十七ヶ條 ふし見 作分 あしち
- らんの事
- 一 和藤清正大坂の出らる事
- 并前田利家病中伏見に起る

和漢

貸本所

東京牛込細工町

誠光堂

池田屋清吉

凡士農工商も夫々の職を家業子園て持用の良物を言ふ
 今日と當りて夏世夏一般の然るに道世写本の巻中の解り白紙
 何れ種々の書入るに形を覚束なきに偶々人感見苦き
 男女の陰癖をも画き吾国文字の中やうに道と未め合事
 同く多し是等ハ必竟一時の真小察しての戯言やん併
 其職を代道異に成付り小癖を著述拙筆著者の信り
 何れも只言信とて其遇ちと免卷中の戯画樂書等一途
 池田屋清吉の意を敢て不喜源一園て承代りて諸君子御あるる爾
 磨石山人識

事

牛本
池清



園ヶ原軍記初篇卷之拾五

柳原康政謀略約当 しんごうてきしん 所目見の更 りえん

并依見城盤石十七ヶ條 まよまよ

作介らんの事

去程中柳原武部太博康政 まよまよ

交代乃途中後畧 まよまよ

あとの其表 まよまよ 依見城 まよまよ あり

て 内府公に御目見し
此頃道次いそ死するを
上より最も大志はといふ
信柳亦も直子洛陽の東山
青龍院の西山と云ふ
我中使者をりし井仔直
政方一や送る親弟の武部
八百余人とて来陣せり
城は小

湯安泰のうへを伏見の城
をひりし今此時洛中の者
たゞ銀がりせ大坂の軍
小橋を冷さや中をさ
ゆとや送りしを我三百人
中男に金銀送りしを洛中
派那に解店のおを賞りし
さやりしとて馬の

水口より毎回一車段に據
りて相懸くさせおきそのうち
觸しつらぬ園東北に大軍来りて
内府公の御免急次をくひ奉
らんしあり榊宗康政大將と成て
小野將ねども二万余人又所次
年一萬のそとありて軍を本多依
波守正信 酒井左衛門尉忠次

奥平九八郎忠昌より大軍
よそをやり今明日の内に来る
手那に軍をい追々来る也
少走りとりていひふりて物
して系衆の人をも驚かす不
又少しれりしそ物候るび
をす風俗より毎回一車段
に據りておきそのうち

中と吹聴して強版紙蒸し
解城搦まり鐵設糸よりこの
時有りとは極毒限りなくさそり
冥赤乃徳大名を羽根ありや
冥赤や南地の事件漢字へ
て同東の軍を又六百騎来りて
兵を糧のよりあ部ののおとく
降参参るる有り又乃中より

尾州三郡のあつしよ軍を充
満せしむる連を強執斜る
此のより大坂は笑へおんを
石田三成叔を冥赤が了たしそ
るべけん大勢入也さる時を
依見乃軍を廣大にぬて中
うるのるるさるのりや
石田より力に徳大名も今と

放つてい大ききり怪れきて
徳川殿も小幣の時ご年武常
表とれた大幣あり給るに今衆人
大幣と放く二四万騎有る
ば申し程り小合戦をお集る
浦とて軍口してその伏見城攻
んとおのあろろりも形く甲斐
あきいりしを放りよける所

く一両日とく櫛平康政を
此は又日直表少くも衆は
小是是とも眼を髪をば四方
手振乱し櫛の歯をり入る
を顔も姿も疲骨を肉の扱
てまきし一害くしる指あり
眼を只朝日のごとく思輝
今の起りし山く用ありとて

軍令改訂連く依見の概
来り初發の修りて井伴忠政
と案内と頼む則ち急須少捕
此披露とく
所前に出

嘉康公大ひり

所機憶りく清さうづまを
りり柳原の前りりも中
軍法と秀でりり子のさびの

御弟清畧の百人の機を扱く
今いさや井伴柳原あり何
此憂ひりりんと所憶りび
是ふとて歴斗舟の西去刀
此所手づりりりりりりり
此時さうり成者も名所部
いりりりりり柳原武部を捕
りりりりりりりりりりりり

友事のの友人 手印に代官
旅人 斗りある びの中 又人
子石 弟 姉 叔 大 南 喜 乃 交代
是 樞 大 翁 乃 所 部 四 所 又 席
相 年 又 友 事 の の 友 人 古 事 の ち
是 輕 二 百 人 又 初 定 方 惣 司 司
本 多 依 後 寺 乃 此 の 雜 名 彼
これ 之 子 余 人 送 中 之 彼 孫 初 也

きつ 我 され とも 強 素 なる ち ざり
此 日 依 見 とも 来りて 陣 一 たり
今 之 殿 小 湯 幣 又 千 余 人 之 の
大 翁 之 ち 井 伴 柳 原 本 多 木
そ ち 之 ち 之 の ち 之 の 之 の 之 の
ひ 大 坂 の 樞 勢 寄 せ 来 ら とも 之
何 事 子 印 之 ち 之 ち 之 ち 之 ち
登 石 の 之 ち 之 ち 之 ち 之 ち 之 ち

大まき年 伊安松松りさきし
実年 伊運目おうん
東恩 文りりこの時よむりて
家康公 今の前旨 御書大名の
のり 御し ころ十七ヶ条にヤ
実身とさるべし ありとて 林道
喜が 文筆と ぬく 別段の
作せ 日けら 色いあく たしく

らんくく 一その理も 伊安
らんくく 色之 甚おのむき
柵橋の 四門 肉を 意響の
ゆの ち 固御 地界 後秀頼
る 未よ 吾友之 比
家康 肉大 長よ 後階の
二 品之 持ら 時 後人
思き せん 何の 様より 有て

徳より之を以て不實なる
心也然れば十七ヶ條の送交
つて中意をばらん考へて
いんべのどくこの
家康様様をそねて中
さうさあり事起りぬゆ
跡に中送るに及ばず
右岡渡塚未だ間を在り
一

幼年の秀頼を侮り西
新しき君を以てさし
自立の志一我徳之去んば
今 家康八年あひ
伏見にて幸骨一秀頼
武神依り事とめん
ぬき跡み討果さんといふ
さうさあり事起りぬゆ

うゝん 家康が為位
高官の元来 年曆格の
ふり之の録も手来事仕
せら功賞の候て之今各
と立合事仰の幸骨一
在伏見して秀頼も補佐
せんとすも濟りあらんを
此 家康もくくあ安く

冥途千老と頼の屋敷
あり亦太閤以来宗廟恩
顧の西に是有る上り下
此事の能まふ裁判有る
秀頼補佐せらるる何れ
りし世度の冥途へ下るる

也

中村或然少輔
徳山入之侍

と訊く徳大名中へ 作あつせつら
されたり是と云ふ者まじの志まじ事まじよ
此存えいののつる事ことして大おほい
感えんし事ことりたる事ことさねおのく
も難えん故か子こ事こと終しゆ事こと一いく故かく
是よりいふ故かが身みのし危あやく
るらといふ故かは折しやう前まへ田でん利り家か
の起おこ病びやうといひ又また訊き前まへ乃の毒どく業ぎやう取と

や訊くきの即すなは大病だいびやうえしこの程ほど
昔むかし生なま小こ諸しよ人にん名な出でてしる毒どく乃の中ちゆう
あり

和わ度ど清せい正せい大だい坂ばん出でる事こと
并なら前まへ田でん利り家か病びやう中ちゆう伏ふ見み起おこること
事こと

曰いはく今いま度ど

泉いづみ康やま公こう大だい坂ばん

の好士へ 作入 是ら今も 逸才
身徳大 名伴 定の 上 御極 考
理 千 迫り 傳へ 千 石田 三 年 分
奸曲と 知れ たり 此 時 亦 及 清正
本 玉より 亦く 秀頼 の 所 所 此
上 誠 歎 くれ 家康公 今
了 下 清 援 見 好く して 万 一 茶 田
利 家 逝 去 も 好 さん なる 必 定

奸人 亦が 執 権 是へ 是の 中 大 事
可 悲 一 み たり 故 事 利 家 事
重 病 之 たり 之 右 依 見 一 未 契 せ
ら 是 して 家康公 一 獨
一 理 明 の 詞 一 依 ぐ
家康公 も 亦 大 坂 へ 御 入
利 家 の 銀 一 入 御 此 せ 御
之 清 用 心 處 重 事 あり 亦 御 入 ぐ

三叔孫略を智て毒味と取て
害し事いんと次
神君これと清泰しあつて
こ色子意しあり後依見
の所彼よりあり後利家遊吉
せらるは良池田 後崎 清野
尾田 加茂 細川 木一列し
石田 三叔孫討んと次石田を

既しは急難逃れごとし
大謀畧を成すは者あり依見
此城は走り入りし
乞ふと曰く倭奸の只花英
のごとし 貞信と松の常
程は如し 儒書し後運の
是を中実より先志はむ
運ししとるをいんのか

とて百習^{ひゃくしゆ}と合^あむとや
儒^{じゆ}書^{しよ}佛^{ぶつ}書^{しよ}軍^{ぐん}書^{しよ}とものよ
その中^{なか}同^{どう} 能^{よく}合^あむ春^{はる}の
花^{はな}木^きと梅^{うめ}辛^{しん}とひ咲^{ひさ}とい
ども却^{かへ}つて茶^{ちや}菴^{あん}と奴^{やつ}斐^ひ
早^{はや}く増^ますくの編^あり也
松^{しょう}と三^{さん}季^きは弓^{きう}とふと阿^あり
花^{はな}足^{あし}ら目^めをけき花^{はな}冬^{ふゆ}なり

ま^ちり子^こ推^さ枯^{かん}く百^{ひゃく}木^{ぼく}志^しが
む時^{とき}と高^{たか}りて初^{はつ}めたる始^{はじめ}
色^{いろ}地^ぢ形^{けい}をも人^{ひと}間^まを又^{また}却^{かへ}
のどく 地^ぢは唯^{ただ}一^{ひと}を奴^{やつ}
ものくさむら車^{くるま}と中^{なか}
花^{はな}の登^{のぼ}りのささうぬと
物^{もの}として先^{まづ}教^{かう}果^{くわ}く冬^{ふゆ}と
いふり枯^{かん}木^{ぼく}と奴^{やつ}りて枯^{かん}人^{びと}

華の之さんば倭人御略と以
て彼乞と我為り徳る
拵へて日只御畧して高分
の事するんば御まをげ
人もあり平生不御法
も常こ貞候する人
頼母らん終めの松の老
盤れ是をと見まら其貞ん

の人を候とのま一と
存記之は程石田が御略を
大ひ平終り利泉
泉康乃支那と石田が支元
成以て奸淫ま人の起
手根え丈夫して石
意らざる名お建存終り
利泉病免の節と及んで

泉康公と和順（和順）して秀頼
の事と内頼（内頼）と有るは眞心
此実義（実義）を取らざればなり

朕（朕）

神皇所書上拾

七ヶ條の内と

作せ実なる

の事なるは徳大名御とあり
うらぶらぶ此段の徳あり西へ
赤あり孫見の上の在り玉極

あり 泉康公の徳（徳）あり是
無事処へ年忽（年忽）のりし条制（条制）
さへ去りしと程なり
是皆石田三成が中搦むる所
ありと程も西へ事合
泉康公一志は後見成輝して
冥在へ帰るる時天下を
中冥在御承別く平放く

秀頼卿の由威光厚く附人
うけしを純んや是兵石田が奸
曲之と云筋も故面も解く
故く教く初轉よ及びびり
は麻加度清正も在まよその
妙法と笑面け急干大板に
来着也元来石田とる不和あり
陣干朝鮮在陣の急転も有り

天下は倭人争入るる時の乱
少く成く秀頼は此の爲なり
又前田利家も寛仁大度
の良将たるを以麻大痛といひ
利家や看りぬらん
内府公の御を解
と清州長政中村一氏大谷
吉隆おと徳合して右の西

大綱言此條一り病中あが
對面をとえあそ中出き振起て
太閤様御他界以後世との騷動
はらわい備へり石田が奸謀ゆ
ふ肉着公とそる公と内不和之
初の如き騷動の場合こそあ
利家逝去のり必ら後一毛
西子孫子とりて不和と成る

木又孫の象康公象康公實事
傳りあそ秀頼は此の處
あつて是よりあそ三威が
倭奸の役をとり百かんと
色々に殺成りやたらに利家
もたりのりあそひのり内
世とあそ
象康公も實事一辭一去終る

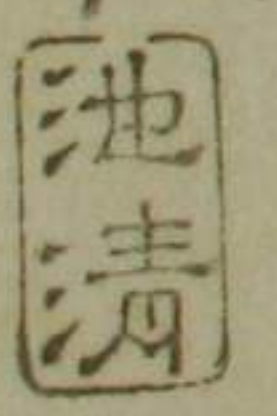
居きよのちのち之徳る小利家
病氣退く空しくは成肥乱
の張りと足くくは成肥乱
らん若利家と得実の人あり
太閤の湯造云とバ秋一生涯を
保つべし長命をば腰石なり
おとくといふ今早を去
に免さるまこと

徳川殿も老年智謀の名將
ありて大録を官して
威高き有是と奴も不和ぬ
ゆの偏り強し人ありは変
なり又冥途へ向けるは秀頼
市初年たつ下危うまゝ之
けしを永病章といふは伏見
之執へく討西の上を承く

頼朝んと守病あれ若新とて
依見へ越きあひたり是偏へ
子秀頼乃以爲と忠ひあふ在
之依く
家康公也

扱多利家真心して志中
ありは人々一生涯乃内理地矣
よそ仁豊なる大羽之疎略なり
是べく〜んとて以違ひ新として

松平又左衛門の流と新執事
以屋敷へ以入者て以休是ゆや
と作もつさる利家時方終
ひく別して地用なり只
徳川屋(以對面)及斗りこと
也
家康公乃以屋敷へ入
の實や病氣大懸不食身殊
絶乱の内之移る変しそ法く〜ん



室ヶ原軍記初篇卷の十一段

池清

池清

室ヶ原軍記初編卷之拾貳

目録

一 利家

家康公の内討親の事

并 家康公前田方へ入御利家

逝去の事

一 七人の荒大名石田越前と斗

事

并三成免急信畧の事

池清

関ヶ原軍記初篇卷之拾貳

家康公

利家

対彪

の事

并

家康公

前向方

入所

利家

逝去の事

去程小前田大納言利家卿

依見の御殿

よりあひく

神居し御對彪ありて後室の

りつゝ大國は他界後せりて十年
壽命と保ちしと存ぞれども
不幸にして冥早死し失ふらん
徳のふ是迄彼是と世の風流
静あゝ心あゝむもらん
及むんとは是偏に倭奸の輩
有る故之今棄つるん
秀頼の保護天下安んずるん

徳川度冥棄つるん
あべ定めし倭人をむろり天下の
混乱を又よす又秀頼の保
内身は事なき所棄つるん
この新しき来りて天下は心
平伏するあり唯々
とけむひて才端を頼み
ありし棄つるん
が嫡子利長事

内主入利家慶と 予入魂の如
又孫孫此約束の事と利長慶
并び此家臣の人々も中
らるゝしと 作せしむ時
利家宣ひらるゝ竹年清重
下らるべしと之より
家康公此承知有て清重
りりりこの故事加刺の徳士

二心ありて園東北清味方
しり新く利家大坂の
ありんとの時又や
指し酒をせし静るる
火をうけ焼くおとの
あり候了格尾帯刀るん
まふ心骨し悔きて
徳川家一徳を

西尾形道獨もろが存まゝ世よの
風流しをりむる急を向か
以移りあゝば由安あるん
指子とゆふく利家お果や
ゆゑさゝば帰あるや
とくく其のゆりあは折加度
清正 浅野長政 細川忠興の
之ゆり利家の外流とて

同傳よりしが皆くゆりたり其
後利家此病言いしゆり
ゆり偏り是れ太閤と一所
用ひむり毒薬此存之叔又
家康公も利家の嗣と志す
向晴の所殿に移りあひ
存不意と移りあひ
そのせり依尼の撤本丸の毒代

多前田徳昌院ありて内々
徳川殿に申上るの事
法用も申しつ本陣を
明海一べしその事
三月十三日前田利家
手前より一五日
家康公作出さるる
手前此病重危し

り候るる候え一
らるる家康も其礼
んば多々申上
一の申上り候
大前田利家
此度申上り候
申上り候
清那寺長本所
是れ石田

とらふわたり申さる合體さへり
らん併しあがら用心をすん
ありこそ則ち清和なりあされ
支方此提めり井仔 柳原末武
者決意さへり鑄炮を前後左右
を堅めおもり利家の完なり
入りのけ交り終も二成が謀略
とぬさんうと御用心を度量て

お伺がら申さる利家の完なり
病氣あらんを 家康を
と御城さるる秀頼との清和
天下安全の為あり速刻に利
家自身相伴者多くその西馳走
おむらば 竹松も近日遊
去るべき利家今古ありあ紀
形を此良形今かりて

堀ひヶ馬安体と見せらるる
以次の馬子に如藤 浅野 細川
堀尾 井伊 柳本 本多あり
母麻石田三成も忍らるる者
よして鬼角子

家康公越えりての御来り
工丈よて秀頼に此御使ひと
いつより来つてやうらら

家康公をくくの御来り
右殿よて一はれ利家此女は
是と名せられぬと秀頼より
以答意の旨とお述る利家
有難と御更あり

家康公よりくく御来り
くは必く毒味なり
名一はれ御初年此御

清土高野り新くところらひて
このうびの井伴柳宗 本多木
あり又多孫の人くしものお孫
池田福崎有馬 金森 徳永木
ありとて石田とて新田が
宅にお集りり 別ち秀家
大おりて大勢軍をとお集り
とて之を家康のお集り

うねりのく 家康公の
清武徳り 忠れくこの新の兵
義徳斗り之は時清野去政と
徳山又之傳来りて
神君の中くこの利永遊去の
後にお誓いり 利永 西入魂
下されぬやうなるもの之の傳て
御神文を下されくいれ

利家屋の末娘のふゆり
もはり夜ゆと言ふも

家康公の行方さぬ人の額
かひとさんむらさきの神りん
るんば依見しゆりて沙汰
しと 帛丸の地山又ふ
ねく郎君くわ今晩利家存命
の肉とと速く郎君しりぬ

家康公の行方さぬ人の額
かひとさんむらさきの神りん
るんば依見しゆりて沙汰
しと 帛丸の地山又ふ
ねく郎君くわ今晩利家存命
の肉とと速く郎君しりぬ

家康公よりもおひ
と頼明く依見しゆりて

ありぬも大酒言利家ゆき
三月十三日逝去りしれ傳
秀頼ゆの不音とゆふを武
曾といひ年をといひゆ傳
といひゆづりて西運の
末とるぬりふり

七人乃荒大名石田三成を討ん

と斗る夏

并三城危急豫畧のち

形く前田大綱言利家ゆき
く在伝大坂支所りて
結くこのさび逝去りしゆ元
結く此為とて嫡子利長加
へ下向ある花も如誓能電城

中三ヶ所の大きき一して利也
も又智常此大なる願也
何よりなく細より権利家
逝去所後ち
宗康公の
所感えの益くさくこの席
徳大名をことごとく伏見内
縁取のりて居し伏見よりて
石田がふ力を難きごとく
成る

は時よ勝んで朝鮮の再受
つて石田がふ力を難きごとく
田輝政 細川右兵衛 加藤嘉明
浅野幸長 尾田吉政 福崎正
則等りの七人のめんくふ力
連判して石田三成が倭奸と憎
む松曲とありしあれをべし
と之を一朝鮮の陣に時えん

骨と云く御くくそあま
くびく終ると構くくその
軍功と達せ石田が真の者
を悉皆能く申すもこれ
石田が優奸と依く之又福原
る外恒足和泉守 能谷内務
卿の之隠物類と云ふせ
めんとする事くく石田

が同族中と成くおまかせ
依て先彼三人を申すは
と名く大岡右地界後公務と
将んとくお似てんは是迄
の事扱ひ承り候し三歳が妹
福原太守の初曲の段人あ
三人ともあはれ切後より
くく是稔便の地仕るは奈石

四どの斗らひあくと急後
この使者と急をりしりる回
も流石と後を使者少くあは
ばこの後節くおと流る代して
又言しりるおのく新解とて
御しその変るは中一執さきこ
志三人あしびりそまが
去しし及び一存く馬威快と

賜りる又軍功の賞さるる國の
此を平者て三人の老をれ
去るとさるあはしりて
今三人の戦後のしりて
切後りしりる事らあひも
去る心と返言しり七人の
あしりしりる人骨糧の大
あらに孫急に返言と笑しり

とていふくくしり七人の面
赤きり評定して又くりや
入まらんらわの評定所くせむ
出返蒼と取まわり近頃残念
とんどの行指もはあはちや
よの控置る数くそいとやり送り
又より七人中合せ近年石田が
御く赤きり様ありそのついでよ

まの三本と討をく次へま也
と邦人よの指り手勢と僅
くそ有合せくの軍名二百餘人
之敵が完へ押詰て討果さん
と用意とおとのへ随はん
妙法に志くり又石田免
ふのやヶ程もあつくと
大のしり油のしり又西

大名を誅し内を治し
ある所の之を石田が倭奸と知
一有兵力ある其の叔父は
人知らする者も有し
肉腐公之款一ある者那れを
湯内存毛斗り難し
これ客うふ呼く斗りあり
さきば今のちや石田幸人よ

せむりより交り音將治
集つたりのあり古太閤の
大毒総て小所者子石田
く三城が毒子ありその思
山のくく急より城者如
て笑ひてらん今をん七人
のめんく手勢武勇余人
よして三城くえつめんといふ

車と笑及びるれり二世一代の
浮沈ありと急なる石田くうへ
来りてこれと告ぐるに成りて
大なるおどろきの日ごあの入
魂しある面々の来ぶ若く是を
知るはるのありとそ結り
懐びたり終るなり世時と終る
縁のありと名をれりん當てる
終る

也又佐井義宣を以て城大なる
あり大鬻此七人殺るひく
んで六中へはあお叶日ん
徳川度へのり入るく不和あり
はらやうよきとて走り
とるれり石田が方とて合費
查る物並びに嫡子隼人正
家人を鳴左近とて卯の士隼

吾々の如く人々を以てして其の
成の刻前馬の赤のり義並と
始く急ぐ姿は隠し鞭致上
く飛か如くに依る一川を
能に
家康公の以銀の
御門を走り込んで其の
御命は城をわづび奪らんと
志ありくは如くくりり

りるは古今の歌の横急の
ちうり
池清

冥ヶ原軍記初篇巻の十二終
池清

